

文学博士 法学博士 浜口重国君の「唐王朝の賤人制度」に対する授賞審査要旨

「唐王朝の賤人制度」の研究は昭和四十一年十月に刊行された浜口重国君の著で、唐時代の官私の賤人に関する制度を詳細にまた総体的に解明した中国社会史研究の重要な業績である。著者は賤人の語を以て良人でないもの、即ち官の太常音声人・雑戸・工戸・楽戸・官戸・官奴婢および私家の部曲・客女・私奴婢の総てを指す言葉として用いている。

本書は主篇六章、外篇六篇から成る。第一章は「私奴婢の研究」と題して、賤人の中の大宗ともいふべき私奴婢の性質を究明し、これを「半人半物」とみる考えに疑問を投じて、私奴婢は主人の「物」であるところに本質があるが、王法の下においては「人」たる資格を附与されていたとして、奴婢と主人との関係、奴婢と国家・君主との関係という二つの側面からこれを把握している。

第二章は「部曲客女の研究」と題する。部曲は奴婢より上級の男性賤人、客女は同じく上級の女性賤人で両者の関係は奴に対する婢に同じであった。部曲・客女は奴婢とはちがひ、主人の毆打致死以上の私刑から或る程度保護されており、売却・贈与・質入れなどされることはなく、奴婢に姓がなかったのに反して、彼等がこれを有するものとされたこと、その他、部曲・客女の法的性格を諸側面から綿密に考察し、半ば奴隷の状態にあった彼等は、本来身売りしたものでなかったという。そして部曲と略同様に扱われた隨身について考え、その来源には家兵の性格があったこ

とを指摘する。

第三章は、「官賤人の研究」で、官奴婢・官戸・雑戸および特殊な役務につく工戸・楽戸・太常音声人の計六種の賤人について、それぞれの性質を詳細に考証している。官賤人はもともと犯罪に対する直接間接の懲罰として没官されたものが主体で、身柄を国家に没収されて官奴婢となり、その後には官戸・雑戸・工戸・楽戸ともなるという。従って官賤人の来由は、人々の経済生活の中から生じる私賤人とは根本的に相違するものであることを論じている。

そして第四章では、この官賤人発生の由来として重要な「唐法上の没官」について考察している。まず没官の理由となる犯罪に関して論述し、次いで高祖時代から玄宗時代におよぶ謀大逆の事件を年代を追って辿り、官が常時所有した官賤人の数を推計し、種々の角度から官賤人の労働が、当時の一般の課口によって得られる官労働全体の十分の一もしくは二に近い量であったと考えている。

第五章「官賤人の由来についての研究」において、著者は官賤人の先行形態に関して、雑戸を中心としながら官戸と工戸と楽戸の由来を年代を遡って尋ねている。雑戸については、後魏時代に存在したものが、北周の末から唐初にかけて一時なくなっていた事実を指摘している。

第六章は「部曲と家人の語」と名づけて、賤人制度に関係する二語をとりあげ、部曲については唐・五代における用例を細かく検討し、家人については唐およびそれ以前の用法を吟味し、漢代の支配構造に論及して、漢の天子が「漢家」のものとして、直接に支配し把握していたのは、漢家の土地によって生活していた庶民層で、士族たちはまだ天子の家人となるに至っていなかったと考えている。

外篇では、その第一篇「唐の陵・墓戸の良賤に就いて」において、唐の初の陵戸・墓戸が原則として賤民であったが、のちに良人戸になったことを論じ、第二篇「晉書武帝紀に見えたる部曲將・部曲督と質任」で、この部曲將・部曲晋が官の軍隊の將校であったことを証明し、第三篇「南北朝時代の兵士の身分と部曲の意味の変化に就いて」、第四篇「唐の部曲・客女と前代の衣食客」、第五篇「唐の賤民、部曲の成立過程」の三篇によって、著者は南北朝から唐におよぶ部曲の意味を兵士および私奴婢の身分との関係において考察し、部曲の来源を私奴婢からの上昇という側面から論じている。

外篇第六篇の「中国史上の古代社会問題に関する覚書」および覚書の補記は、中国史の時代区分の問題を著者の個別研究に即して論じたもので、漢末に時代の転換を認める見解を排して、春秋戦国から中唐までを一連のものとする考え方をとる一方、秦漢から隋唐および宋元明清の間を中国的中世であるとみて、その中に段階を置いて、中唐頃までを古代的要素の残存していた時期とみ、それ以後を中世的中世的色彩の下に統一された時期と判断している。漢から唐の中頃までの賤人は、奢侈的用途のものも居ないではないが、全体からみて生産的用途もしくは家事労働用のものが大部分で、その数は多い時でも四・五百万人を越えることはなく、恐らく二百万人前後にとどまったと推測し、漢唐の盛時に良人の数が統計に上っただけで五千数百万に達していたことと併せ考えている。

なお浜口君は、同じ昭和四十一年に「秦漢隋唐史の研究」上下二巻を發表しているが、これらは制度史・社会史、特に兵制に関する基本的研究を多く載せており、「唐王朝の賤人制度」はこれらと併せて読むことによって、その成果を更によく理解することができる。

本書は比較的、零細な史料を網羅して綿密な考察を加えており、後進学徒の指針とすべき業績として高く評価されるものである。